

玉照集

四

子多12  
104  
4





音曲玉淵集四

花傳書曰 柿謎といふは 奇道より出る也 先難後津

浅香山の云葉にまゝて 長奇をたけけ 柿謎にふりて

徳と号せり 秘るに依り 秘然うらうらと思ひん 人為奇道

なきてハ叶小ま 能く奇道をあはれけ 公事 行装也

あはれ人れ 視ハハ 皆とえはらなる 公事をいひ行言

おぼくても 腹のけある事 のこなり 先難道胸よりま

も 月花を身ても 雨れ後を風れ 吹も虫も 喜れすたく

と ぼくともあり 面白やと公 難れんを思ひ 合せく 秘ハ秘

利 117 4

門チ 12  
辨  
卷

東古  
学  
校

玉淵



一入面口さありさうに心は... 何れより人貴人  
さ人れは... 俄に... 折又...  
たる口に出る物あり第一は字性用合文字うつり  
伸縮の教あるまむ入... 下... 一字...  
三字... 送り... たり  
あり... 切... あり... あり...  
次... あり... あり...  
小... あり... あり...  
如... あり... あり...

てうたふなり... あり...  
く... あり...  
あり... あり...  
あり... あり...  
あり... あり...

一混沌懐中抄の書法ハ

あ... あり...  
今... あり...  
あり... あり...  
あり... あり...  
あり... あり...  
あり... あり...

貫之  
大貳



前此者之乃哥ハ何れ也。其後も好及吹て是  
口もと何れ了。其耳もも立其感公深一後乃大感れ  
其ハ寺受不き面白たやうなれた教及吹一返せは口  
又二りく南を清み其家も及を曲に劣まりこ古人  
中ぞれハ音曲と清水乃哥ハ如くやすうにを  
けさく耳又立ぬやうに何れ海は一きとの事な衆

説文<sup>二</sup> 凡音以和為主<sup>一</sup>

筆<sup>二</sup> 當時ハ後白多ぬ又其れ強くハうれ祝言と完  
又すくやんを後二ぢ一其れも和らぬを悲ひのやう

に是やるぬハ一是下愚れ也声も及先和らた強  
ひ習ハ口中此文字ハハふとやう一もて功を博りハ  
祝言を悦み一くゆの之新ぬ音も及悲一とと木ハハ入  
才又声ハぬ物もぬハ一トヤリ一されを花紅系和く見事  
ぬ物ハちくても本はきか一け枝ありあ一たハ見悲し  
神ハ音曲ハ慰と物も及反癖<sup>クセ</sup>なくゆめ能やうに嗜<sup>タメニ</sup>む  
たき事な別) 花侍書<sup>三</sup>モ 聲を忘れて曲を忘事曲と  
ますれく調子成志と調子を忘とあ拍子を忘れと書  
せり努力と声を能出さうと二意に和を付さぬうは







竹居一

見返せば紅と紅葉もあがりたり

浦の管屋の秋乃夕々れ

定意

世歌の青曲の命なりとて里傳に紅粉をぬきしれは  
をのつゝ風流れ神ぬきとてり先事れ長嘆なりゆか  
わすれれりろきより夢の空想してこそせの義ハ世  
時にありてハ是は境の事ありと思ふに秋乃夕々  
れ浦の管屋秋みまはいつともわらぬ静かなる死を  
感へぬ言語のまえとて所何れかよりわかくはく

ろハとわかれ紅色の命とたり神なり誰れ功勲これハ  
曰一何の強ハわかくはまはきさころの勢乃位きて秘古  
乃功つより年経まはどのつゝ声におと出く義色ハ  
ゆく義かなれ自然れ功もめくして勢をよやく細く  
わきと奥有わきにすま事あるとてなり但年れ  
あつれとて切者もつひとて唯徳をのく味して  
あひ結りて老切れ入る心けきられとも若き  
もの物乃よのさか一毎切あれ人も多うゆ下されも  
写物ハの弁交を病とん痛ハを青曲乃うたひとれ



事を病む人 又いふにさるるを思ふに徳あり能く人をも  
視よと呼ぶ功者ありの 幾度徳ふても何事あく日一  
事よそは其感ふおたおなり一書れ肉は一所二所ハ移委  
りなきも視ひぬく拍子かぬ拍子かとも是れは二處ま  
りよそりんや但自身は他定たるハ極事如く古人  
乃徳いふ公移委なりかといふ後と是を折しるも徳ひ  
作るく又移委多曲に有くハ但初心の人ハ勢く一なり  
と視少の事を思有へ

説文<sup>ニ</sup> 節竹<sup>ツニヤカ</sup>約也

音曲はきく大竹乃竹のまろく

世に公得たりしをくちをそとあつた徳ひ  
のばりあまのりなる徳なりハ何後と思ふて道一曰  
やう如神をいふもはけあつた下も次はよる家  
是皆なり乃多くて耳に障り也先大口のうを揚ふ大口  
なれん文字大ききまて徳志する文字ちいさくは徳志  
ありと揚きと静ぬとあつた起るは大方の遠しなり  
大ききまてあつた事ハちいさく  
ちいさくはむまは大きき形







之物を向の是と見れりさなり  
一五音ヲシの事

第一祝言

神祇等

此曲味ハ碎立ニ年此始乃法位ひと心ありや一是也  
あゆく事事もなくもく祝言と一礼を承乃となり  
又入イリホカ響あつくとかく心に祝云哉あくと声をい  
ぬりこと性正一をむゆとわん細くあするく  
と徳小曲一此音諸曲の地神也強き方をとど  
万代の松をききん成いとひはる。

ちと勢此陰に何んとたわへは

第二幽玄

魁等

此曲味ハ餘情と中と心にユツ裕を拵花山よ今く日法也一  
廣林よ至て家路をまされ汝路を承くに福徳を行  
舟を魁女雲乃なきえり厚のゆ束成たわふ公なり

まこと思んかこ世のみ乃極あり

此此意ち執事乃何けかの

夕ぐれは難波の浦を居候せは

新なりうか小沖のほりあり

第三哀慕

有



此曲味ハ心術此幽玄乃深く幽なるあり譬之を宮女此心  
 ぞりしをぬくはあはすくやたお母らるぬりかゝ又賤し  
 此女乃人よ厚きうを思ひまんと儚に引結ひても極めて  
 心き拙き物なりは悲慕の曲風相似たり心乃切あり  
 事ハや向ここなるれども風流は何とあく有るかゝ加振  
 又何と好くすうくこ有るに公の體行つらりれ  
 必し風乃本意とぬりしとを笑より信定たるをり  
 こそハ物弱く行暇はたうあわは程そはれ用心を  
 以希幽玄れ余情のは春乃咲れ如く世悲慕の月秋

乃夕へををむりさう

あやたのあといろとよま  
 物言にまかりあひれはあきけ  
 ああ思まうれのもは物り

此曲をさかむりし一絶也  
 悲慕は給らぬさきん其子細の思ひ入るは必世  
 声のぬくまにやまひん又あひいんは悲乃道程うす  
 くぬあり只一心城悲慕のあて種あり分別あり

第四 哀傷

五等



世曲味ハ来れ花もちるまへは酒果て野山の風はあ  
すきた木この指酒芽系れまををんかのか一茅屋  
ろ何れなるに虫れ声おすろお敷心成るをさるり  
一人の走もたたるをわさるるのみか後とありへり我  
身れうふなるんと照しこつ河の目を流やまそいり  
形心世道乃露と消あんと就したる心成り但  
かくつえ又悔りくをたさるるをさるせんとすれ  
とせりまやうやうまぬく浅き一物籠くあぬやう  
に心成れ只ましく此余情を捨く心成るを

あつちやする事肝要な案

あつちや神に祈り一様乃  
まはれ無愛をさるり  
まはれ露りとの事や世中乃  
をたれさるるをさるる

園曲乃事

二河此心さらうたけて物色志の心を平とん気定  
上の公なり又や四音れ外あり何れも心得た不思  
後不可得れ祈お成故よ外とはつた又四音一音  
あり共故を四音を得いかに成就する祈を園曲



と名月あり又若此後よりてある所を反接之處  
よりの人の耳に與らざるに接ふ者世道此外也

世曲ハ音々四音成就して自然又騰之けざる位也

えぢは園曲成就ある一成一切ある也之ハ成たまは後言ハ音を成

極め正同神を得たせばたゞを庭に松ありを冬に枝を  
みかましく成就すしと云心

ためわめて修むは幸氣面會さやうなれども心見さ

めするあり只困ぬを山れ若なるの小松れ自然又雨露

兼若乃を憂をうけ我とこび苦むしてえものれさ

孰れらとて終神にんるるとして心所よとて面白け

と悲別音曲ハ声よ力を忘れく心に力減りゆ

但心の9ハ仕舞よもこも是にちうとわすまて心よ力を

前よふ如としてこつ小事第一乃おひなり世事知る人ハ

兼よ力れ法語を知りりも心清ら事ぬへとて

い流しるやわらひはかりかこふれ

むすまらりよとに若乃むをまへ

花傳書よも若くれ西音をすれく強ひ得もハ多ら

世乱曲とゆふさ由内乃強ひる若なるもや園曲に

物と強たより百れ道玉のみ知りてみるは花



ころこえええてきみのをゆめぬかへーとほしく切  
碓氷磨えへー

又音とは先程云れゆうりんよ

急ぎ急ぎ傷さきてそ礼曲

一十辨れ次第 古書二

第一 祝言乃心 相生松 ふゆ 弓八幡

はきくひんを治め婦夫れ契りつた故第一祝言  
又先を用ゆる何れかろくうてうたをぬへ

第二 幽玄乃心 江口 小堰

世たりひんをめたう方と申ゆる花やのちをぬへ

あつこはやくに福へー

第三 恋慕乃心 初女 子妻

小橋 重荷

はたりひん何事と有つとも只恋慕をうりれ心用之

第四 哀傷乃心 そとは小町 松風

野々文 井筒 隅田河

は難ひん甘てえあまこなき人れ夏幻のふあれた後  
衣形家神なり脇色同し公あり



第五 田走野人の心

横山

海人

葛城

少くさ

芦刈

以類ハ八表ハ果スル神也其のつら此神ハ今ハ何レ也

第六 神祇乃心

ふとすそ

三編

春日社神

深きま

老松紅梅殿

此たハ八社本に及て其公志んめんよみふる心也

第七 佛雨乃心

南麻

墨深橋

誓教寺

めんらん

以事ハハ佛所をちんて得たれみちをりてあ

かろしうんをを利

第八 無著乃心

盛久

檀風

はたハハ何事もうまハ思ハハ海すこ云葉也

也一但賜又あひての口傳也

第九 迷懐乃心

夏後

ぬれきぬ

橋立

西行橋

此事ハハ何事也迷懐は方かたん公けよハ心と以て  
て要る下ハ海をりて海能とあす思案して  
其者これて海に懸すやうハ心也



第十仁義禮智信の心

仁義禮

土車

縁通

接待

ひたひの神をうやまひは久佛成致しんを先則  
義也親の命よかりり他の人此初をよむんを  
うんをむむひとすへ一唯情あり神を致さ  
身ん者ハ本石よ異ありあ大方世上ハ動る物也  
をり心得てハ強も能もなるとは延の風流一也  
を致しんは先其能乃公又身神となりて能と  
一進ハは極に叶いしう延年を利さるもの

あううくと能又なせは行に本をばきたる神  
ゆゑ一延の此道をき一なまはは十神乃公  
一て取心を力門く情有へ一

一物ねひは数多乃公を

第一別を慕ふ物ね

規女

せと丸

名越乃後

第二家とねひ出る物ね

思乱心美よりね也

- 百萬
- すみと川
- 橋立
- 柏崎
- 板地物ね
- 橋門



第三 為計を謀るに物に物 心中ハ物に物也

三井寺 菘を教 花筵

第四 物に氣を物に物 物に物に物

うた舟 舟台 鷗田

二人静

第五 枕心乃物に物

松風 卒都婆小町

如斯いづま心動家事なまは能れり為も一々に  
定し其心まけくぬへし但れ女とて物に

こゝろ天別り

一上中下此多別の事

女上 定家 唯乃家 内親王 沙息所 ありを上下

中 源氏徳頼 うた舟 宋女 交女なまは 中上下

下 菘戸 海人 海の女ありて 下上下

者上 忠皮 通盛 清後 公達あり故 上上下

中 朝長 八橋 源氏武者 中上下

下 実盛 兼平 藤の樹 侍なり故 下下者

一勝修能 田村 是ハ祝言 修能と云 八嶋 藤 祝言ありは修能を云也



一 リキガサヤダカ道細道の事

カ樹細勸尺

カ道ハ現在の鬼

強くけり死之

細道ハ神鬼之 眞達の鬼 二面やたに公付へ

一 僧口千の事

住僧住侶 海之 法下 大口舌の也是ハ志志

おもくと強きすへ 大口舌の僧はうづ自傷とて

考此僧なりきうとて孤孤也

右大格如此あり其一番くよ公考也傳之を辨本の  
脇ハうづ自傷とて出ても冥明寺時執あり格約あり日蓮

上人傳り此也其外名僧達乃名を伝さぬ俣脇傳

り心をもて強へ 熱して僧脇に隔るは毒毎よ公が

りゆへ 極又去夫ツし早或は中入後乃面出立を并人強

を 一面出立に似合ぬ音曲ハ僻事也

考之く此位にありきか家へ

考多の男女俣俣り 何れ

一 考して強物の上たに吟とらふを強曲も其委りまし強に  
和吟をといひ事あるハ全く聲音此吟あり一人今たふを  
強吹といひ或は歌を吹らるま歌被指と強吹を吟あり







明のユリれひるしを著して書きたるす所を以てたり  
せとせぬせしり

△めたるせおとせたる事一是もめひるし一おもむきり一あり  
かゝるせの一セイといふ小教れ後より推出一男たるせの一  
セイといふ大教れ後より祝ひ等をいふ是も大おれひる  
し也但難子方みなめたるせおとせといふよりえつききく  
陰陽のり又世なるを利やらむりつまこあり

酒宴を止たまふは公此肉を痛りき 男持士 新てきむ

是をめたるせおとせと教むる者も是も陰陽はけそのごとく

一 聲コエといふと言コトバといふの事

一 二意のきこえしうと略をれは耳は受所聲。口はりふお  
こば別字義あり 書經 歌カ水言スイゴンとあり 歌うたふな  
もて視ふは言をばくする也依云章をさす所の皆  
うしよ也章のたを和といふも是もてかへ

一 皮肉骨の事 骨ハ 強 肉ハ 禿 皮ハ 數

磨食乃玉を玉神よろこ其止を後して包板るを  
走ぬふく推ゆしといふをいふあり

祝ひこぬわひよた祝祈りきこぬに







△何ハ流れをいふこと

△乃何ハさしことぬらさるる

△さし流るる言はれあつらひ難く望みひの内鼻筋れ無り  
よそ息を切懸してさし流るる言はれあつらひ難く望みひの内鼻筋れ無り

△何ハさしことぬらさるる

△さし流るる言はれあつらひ難く望みひの内鼻筋れ無り

△さし流るる言はれあつらひ難く望みひの内鼻筋れ無り

△さし流るる言はれあつらひ難く望みひの内鼻筋れ無り

△さし流るる言はれあつらひ難く望みひの内鼻筋れ無り

△さし流るる言はれあつらひ難く望みひの内鼻筋れ無り

△多くに世流るる言はれあつらひ難く望みひの内鼻筋れ無り

△さし流るる言はれあつらひ難く望みひの内鼻筋れ無り

△乃何ハさしことぬらさるる

△さし流るる言はれあつらひ難く望みひの内鼻筋れ無り

△さし流るる言はれあつらひ難く望みひの内鼻筋れ無り

△二世ハの教を傳へて流るる言はれあつらひ難く望みひの内鼻筋れ無り

△井と教を傳へて流るる言はれあつらひ難く望みひの内鼻筋れ無り

△教ハ井とすも流るる言はれあつらひ難く望みひの内鼻筋れ無り

△流るる言はれあつらひ難く望みひの内鼻筋れ無り



幸 山さとし物此淋しき 雨のふたあし洛陽此

一 親心の曲れ事

△縁を扱ふ 縁のありに

△王城の鬼門を尋り居く

△おぬへし又忠にたり 急ニ扱不虫 かるラ直

△夏ハ則ちあふなり 一ツト大

△どちどちの土となり 下ニ

△海津此浦もあふなり 一ツト大

△これ終て子内親王

此事ト下ノ事也曲事ノ眼也  
ソニツニ扱ふなり

夏中ニ又た

ゆめ物扱ハ是直也  
盛久たつてヨリ心整ル

是迄本芳殿の言及物扱  
新ハ是をヨリ公カル

そハ是事の心  
志のめんとくヨリ又生ル心  
夏まで内親王十名宗故心整

△雲れぬし略たも呆く

△字信極れ中のる引をかり ハ

△清昭の別取を今マくと

△平路山のあし

△さしやうれ山もく生死入海なり

△川の対う生死乃うみをほり山を感く

△夜あけ人志所まり風吹く

△松吹く世のひらき造もさし一き

△き造の事

夏ハ是也  
心持シ  
未文ニ事リ

△さしまるとあや

△新付の板より引ちきつて

△よこへて碁とあつて

病ハらさく山ハ大きき事

ラセテホクセマ



△何乃難波れみ川の浦

爰にて地を

△あまなるうらを

又是地鳴ハ

△たのめて事ぬ夜はつらきも

櫛丁はまはくく

△緩急のゆ

△菖角たひぬひーう。夜うけ人志川まうてぬ

かぬあまなり。あはいたに胡長の内自書くやさそあへん  
よーもあうらき

△又りやんよかきんと思ひ。不使まはなーくもど門て引

よせ二刀さー。其侍あま川めて海まーう。梅ハ海。

△先書を後急の夕切とつ小但何あかて口いさくたうん

△今の物続ハ川のうまそを。去の三月々あかすそを

△其見乃うハ 十二さい 主のあハ 梅あ丸

△花君とのあうんせいよそハ 何と花あう

かやうの不幸とは各家のこシテハあくやのな公よそあよ向  
くか早ハユリと春ハシテトローヤうよあてハ遊れて然

一心を切口と切或は不切差別の度

△口も心も切所

△名に消しうた者也

△まはたも中らへ。射ハあうら



○口も心も不切苦の不

△不切 天白く

△風たち不切をかれ

○口も不切して心を切所

△春色夏だけ秋来る

△舟とくがらのかえん

△身をえくお成かへて

△嵐山下母分もあの

△長後よ矢一節

△くれふらうを笑えん

○口も切ても心を不切苦乃不

△子おやすくと守ぬれ花垣

△晨鐘夕梵のひきたらあふゆい

△又も雨ハ心なき

△便よまーい車なり

△あさき縁こう

△ほゆれをうら

△神神来現し娘は

△そのひなきまきかゝる

○口も心も情も切故めて遠出す不

△あま〜く月の夜ふは△竹方知の女ては△まきと

一説十一の事

かまりハ音曲れ中よそ第一中あつた物あり能く不切心り  
けて暗むへー文字祀星ハ娘ふあ〜かまりハ拍子とささ  
て或は依上依下れさ家のなひきたにゆりて入事おれ  
教へてにをな又終りうかれ章ハ正の唱へよ遠ひて



と婦一うらまへは若一かみ所とひあ大略  
てふをばノ文字あり 又曰及字の祝ハ此字より  
祝儀之れを和久に二字ある心す一  
祝儀ハ此字より  
てふをばノ

○詞乃文字祝ハ嫌 太の章れ如く子一丸ハちまりこ

△後戸乃一うりま一の セイ △この一うり一あひま

△稀高詩せいま一と一ハ 後木きまわりて見

△くしひ一又位のせう △あふかま

△あま人の波夕 △花より死ハ海

△木一ハ一え一あ一う一あ

○初の句切此祝のま一たそ二字四字下ハ別して中の

物也 文字正訓依テ 又あひ 思ひ 急ハ 是てハ 吾あ

△南平の人な 古今相曰一

△又は文をもあ用はわけて △ちりあれを去

○拍子あき平のう一そて現平の祝 是ハ大いこまやひの

△遠近の江の浦山を △其りたとうあひて

△これくま大慈大慈 △かひひ一有る海を

△色か一きりたの比し △ちり西うり杉本極

太ハく章の下ハ祝なり



胡 △今ハ一あり也

北 △於一も何也

三 △一称一合行一のこも

右ハトル章のすまみぬ飛をこ

○拍子まふ章のちひうろ批 先ハ正訓は遠ふこ

拍 △たすけ舟まふのきりよ 名ノハハク一批をゆうす

三 △近年 志願也 △后位つらまはりゆひき

五 △かこなふよをくら △あをを見ふとあへ

る △始會のゆをくよ △子迎付く筆をぬき

○章ハ同事を祝ひやうまを祝ふかぬ取 右ハ吉 左ハ次

北 △教万務れつひりのを △志進の志と場ゆ

五 △そふ然與わりの取 △帯の燈うけのむ

内 △まもるぬしを身れつふを切 △きよなる縁をまのまにぬき祝

○一 祝ハ教ス

五 △橋より一歌 △石山ハ親母音

三 △所ハさる妙なり △西も清まつ時會風。校を

三 △山田矣橋の △隆路のちまうす

り △かよハ山陰れか養川や △神をつらぬるまををわて



ね  
△いんごう  
△それハ留海  
△さよ又清し

あつてや飛曲年日上端福長等々のひ字祝て出さず拍子  
よなびき列をりて文字おもく必故祝を叙すにサレの出端又  
ありし同答おあとの體さをかとする故別ち祝をきらふ

○依上字依下字此祝ハあまのりよあへん

井  
△是れ板井を流ひあけ花水  
是ハ花のあはすりよあへん  
是ハ花のあはすりよあへん

やへもあはれは花あはすりよ  
是ハ花トあへん  
是ハ花トあへん

乳  
△清くはみさうり新へ  
公よりト新  
虎ノ如クハ新

撥  
△比ハ裏海月あはれ  
右同也

○依上依下の名別山の字をきり

△山に  
△山路  
△山崎  
△あく山  
△ひし山  
△山姥

一不のぬ界ぬ乃事

△各のあせしやうたまぬ  
但下の三字下リモは時ハク  
音ニを呂ヨハあま

行  
△白川此園をもるぬ  
玉  
△赤物計を象よりまぬ  
△清くそえてあさぬ

△目もそぬ舟よのれと社  
はたうひかりぬまてぬノ章下ル  
既事トてくるぬ

△らりみいつきぬ  
△らりれたぬあ

通  
△思ひもろぬ車此あちに  
はらひあぬまてぬノ章すごと  
車ノ前方の義也

太羽の新めは拍子有赤ハ大秋長あか







あく後までしんくばいまうに少声を借むじやうに  
親ふ又是よりちんくくさあなは二あしんりの大きに後  
なり結吃まそ七親く事也遊子の吹曲好む入あ  
死ゆい用あきしりあうう名まき故死す

一声松の曲れ事

音松も悠々まもの小聲れつまりたる時死或は  
我よりき聲れ人と生會親の時ままああ家の無  
念あれ是形ものあけまきあをまああ歌をせあ  
うくあ飛辱れると其時にくらあの新いんこ

常らりハ少つよそに穩し響きて強けふよあしん  
うしんよを声松とつああり

一乃何りまうくらあは事

より後ハ定家の早下と後ハ江口は腸とやん  
是ハ異名として各別のもの也腸よりよも不限外  
よ習ひいら事ああり

一白次あり 息継の曲もま 白いらをど如ても息を突ハやん  
其まき次いり

玉 △胡夕あま玉の井れ あう 親聲りハ 小瓶

地 △まそしちりあ飯のそに形あ 日



あ みやこれしもの遊つくや <sup>白</sup> 橋まで たり

水 △水れとあふふ <sup>白</sup> 宿まきく <sup>白</sup> 宿の 日

れ △あさきの芝を行きて <sup>白</sup> 養れ髪を <sup>白</sup> る 日

え △月も妙 <sup>白</sup> 宿法の <sup>白</sup> 庭風 <sup>白</sup> 乃ち <sup>白</sup> せ <sup>白</sup> 日

是ハ章を早してよりべきを思ふ事にて味ハ旅を息次の曲ト云

一白切の息継れ事

。白切れあゝの息乃 絶多う 熱し 甚而 能程く <sup>白</sup> 絶  
へし 出断 熱して 声より 島の 足 <sup>白</sup> 乃 <sup>白</sup> 絶

みれ 人乃 現ひの <sup>白</sup> うちれ <sup>白</sup> 乃 <sup>白</sup> 絶  
な <sup>白</sup> 乃 <sup>白</sup> 絶

。かつ 女あとの 絶よ 息決あつて <sup>白</sup> 絶  
を 能考 切へし 拍子 <sup>白</sup> 絶  
息の ほまり たる 時て <sup>白</sup> 絶  
そ <sup>白</sup> 乃 <sup>白</sup> 絶  
して 息を <sup>白</sup> 絶

。息継所 <sup>白</sup> 絶

△物乃 淋し 絶 <sup>白</sup> 絶

△絶ハ <sup>白</sup> 絶



但引はぐけて持ぬまは流れ又押入て切も何れは息  
ハ継ても心に持て次の字を出すへいむ次乃出る既字に  
息をあらわしん

息つきに南家う物どひきうな歌  
そやく志川くにかろくちこく

○女息男息の匂切

△液らりりれ海をせハ男息。それをもみえぬ妻人を女息

△物して童り方を吊ひ。女息舞あき未れ妙音の男息

女息男息のうらまとも皆口の四ま切心

○匂切よ水スレ路とりのり

たとふは流あとの葉末に流たまりてきめり

下へまれ葉ハ切りひとなくよまをいそく匂切

初より一初も同様

○文字はぐき或はてにそ及そ息流を嫌よ

△急山れ雨の夜草白夜の三△志あわの湯乃一川三

△なまる果そそふらふり子△まあ長を神えたりあ

○息を切てあしを流す所

△むしあそりぞ△きも魂も切△あ底の△息あれ

○息トあし一交り切あ

△清くこあるあをそ流あよ押入られて千石の底よ



○おして勺を切へきぬとれ二字を合せ或はウラ故也  
又持るも悪し押さるもおり元來是れ御めやう悪  
きといふ是あまる也平音一文字あまはぬやう又心  
をさめぬととる御め御を控く勺を切へし詞也  
曰し位と持らんき切りの同多へ候す亦ハ若列也

<sup>申</sup>△物乃淋し乾燥せられて  
△とあるを社同系す又これ

<sup>申</sup>△物乃淋し乾燥せられて  
<sup>申</sup>△とあるを社同系す又これ

○拍子も亦れ是能鼓のわけき亦ハ是もそあひし  
を大と大鼓の鼓声を是に合せしは又列故是傳り  
あましく其次れ拍子もあまる也是ハ能移しむ有へし

之鼓れ声あかくて出る亦者二字指としてつむる亦多し  
ヤト出りて出る亦ハ能石一列被りてヤト出る声れ内よ  
きを継へしヤアヤツヤツハハつともヤノるの心同あまかか  
一列居のあまやうも切是をつぎむ寄れたあきやうに  
よく是を止へしし乾燥りてハ能たもあまなり  
是傳きハ拍子れをそにさやくきれ

○マアの間是傳りてあきハ外へ出るやアト内へ候マアト  
の音別なれたゆへなり  
<sup>申</sup>△とあるはぬとれヤアヤア  
△とあるはぬとれヤアヤア



後  
△又引被起曰一法をマア

おかしあをせし何名を月  
きて内へくぬマア

△月をせむる扇の法はマア

太田公

但云云は名の次のマアありて流しては飛んてびらる

右乃名別考ふへーマアの乃より浪皆内介れ名別

何まを別してマアの同耳は立拍子あまのこみかへけ

声を鼻に拍子ら故あり或は又文字みつても思ふ

所へのむふーあといまは六つ十日前あり

△妹事にくりとたよるん かの子太き三言は誤ス

△右本々たよる起名を

△かやくれせあは厚なきて

○乃の鼻を短く切てハ悪

△かきりら。ゆりまぬまこと花もかたてせ成れあゆの

△名と清き。あれ 何ハまねる。ひらり

一息を起す所より鼻を起すの

○鼻を起しへき

是ハよあつ縁滑してはあはけよ起ス

△松ぬきの敷うせりて 起元 △靴押 起元 ままう

△くくふーあり 起元 けあ

○下よて揺ふ玉に鼻を起す事

毛ハを起す入ー流くおこせなはて文字あつて置く



楊 かまちはあゝぬまうまをたへー  
 △借老同穴れかゝいも △今乃小町を  
 松 △みらりにええー 黒髪ハ

○息を起しておき所ののり

三 △まご侍やうよ  
 拍 △まゝんれをいぬま  
 新 △常船亦乃えんを刻すま  
 先本は息の余りまで視る

○息の起ーやうまで惣度やめか所

江 △らのいハ抑まざるま  
 起 △積りておひの語  
 拍 △おむすゝとありとやえ  
 八 △くいー 起 五位乃耐

白 △人ち乃にぬるん  
 山 △息を起すか 起 なる

幸 △はさみこれのまゝなりと  
 起 先皆起すお遠之

○息を起して能示乃事

是を一字下ル章とのすゝぬは付元下れすぬに付う二字  
 一川はぬお之他上下れかかまうぬやうは耳にたぬやう  
 息を起す家むは有

三 △は境一はかかむをに  
 三 △と首一まゝんみでり  
 拍 △ひゆかんよあよ  
 △是までと花ハ根に

○息を起す一息にて視めて能示  
 拍 祖よりまはあゝん

老 △お教うつらりまぬさん  
 △やりの本んけ



トホト  
△<sup>トホト</sup>まゝに  
△<sup>トホト</sup>まゝに

△<sup>トホト</sup>まゝに

一 夕まゝのり

是はたけら曲也。是て能り。是らるる。そは。一 獨り  
内祝のたまの。不ハ。是由。教。無。中。の。用。心。す。る。の。り。

一 付新ツケドコロといふ事

拍子止し。一 智。さ。ぬ。糸。竹。といふ。字。より。止。出。ス。何。の。り  
ま。て。出。し。こ。り。の。り。是。並。也。 世。流。の。り。の。り。有。

△<sup>トホト</sup>美。え。ら。ん。成。た。一。む。ハ。ま。こ。ま。れ。た。ゆ。よ。折。を。

△<sup>トホト</sup>見。る。人。も。あ。き。い。ま。さ。の。ち。ろ。ろ。と。お。

△<sup>トホト</sup>ま。れ。る。あ。く。み。れ。女。を。り。す。て。若。人。の。

トホト  
トホト  
トホト

△<sup>トホト</sup>ま。ろ。く。と。て。あ。め。た。ぬ。が。け。有。る。ゆ。て  
△<sup>トホト</sup>ま。れ。た。ぬ。よ。折。を。  
世。流。の。り。の。り。有。

一 獨り吟乃事

大鼓小鼓を教るに。祝の番。教流。と。大。概。定。り。み。て。又。其  
外。も。亦。な。り。一。獨。ハ。先。瀬。子。方。を。お。も。こ。す。故。何。そ  
も。共。も。一。方。れ。と。む。物。を。祝。小。之。極。と。知。の。ぬ。教  
す。む。而。も。あ。き。ま。き。て。能。を。く。げ。も。あ。く。ん。又。う。ら。ま。す  
ぢ。ひ。か。と。亦。不。も。同。也。な。れ。拍。子。を。む。の。り。又。お。け。一  
こ。く。も。新。し。心。持。有。へ。一 確。る。は。二。井。も。名。余。多。ヨリ  
花。笛。又。多。し。ヨリ。女。氏。サ。レ。内。下。音。の。り。祝。出。ス。又  
若。人。乃。而。也。は。信。て。サ。レ。の。物。の。り。祝。の。り。也。



以対ハサシの内ニ所多しを替してサシの内ありて何  
レ故との祝やうを妙不せし九たり ねん切と落より  
其(刈)の後の返駒をく下切迄 安宅部を根放下後と落  
ヨリホろめ其不あしを左教ハ小垣柱のセハミヤ  
りハワカより祝出ス又曲舞の末を教の弁出ヨリ  
も祝小南ナハミヨリ 舞多あ方ヨリ 是日祝神ヨリ  
の之とヨリ 大振也

△調一セイハ大鼓小鼓ともよせせし九 玉ハ法より一セイヲササレ  
或はうね舟玉うろくををも待祝より 徳して一セイを  
ササリ一セイの出不あしを左教も持的実望ちとサ也  
△調一管ハ大鼓もも小鼓もも笛を加へ祝ハ独吟也  
とせ成江口は二鼓防の祝ハ独吟とあて適ハは

亦もを

△中太の一音一羽一管トハハハニ多し事也  
△二段通一ころのの番通ハ出をよを左教秘のそ  
常とは形似故祝ハ出一あしあり  
右太や一あしうろくハ熊委細子不記

一 小謡の事足指あて祝のハ大度乃おあり四重其場  
乃お急を考へ足祝言と祝ハ一機をとりたり  
稍く吟はよく物を略せさるう祝云あり

音曲はま川 祝云をま川を  
さて是 勢云ま川が 義傷

叔小祝ハ席より 篠小ハ一ころ妙あつて音信ハト下











△ひえ坂とろり

△つま子をえかち

一 下ノ中ノ吟のり

トニテウクトモス

△ゆるに長融か葉も

△六密いましぬるに

△木きお管へてやう

△柝一かたに津浦あふ

一 拍と引との事

・柝ハ拍子よぬりん拍  
引ハ拍子よわめて引  
用之体ム心  
辨之行心

△そくき木れ夜のさめえ

△みかろいハ山陰れ

△林風ひやくくに吹落て

△たうなハをさう引汐の

△それういひしうへやうれ

△ろきんのぬれ夜

一 くらとさほろろの事

○花傳玄三曰一字志有りニ字志有りといふやまニ字うらひて  
ニ字めを志ほる哉一字志介とてくはう一のやと又ニ字志  
有りてやハニ字現してニ字めを志ほるをニ字一有りてやう

第一句花ふありト也

○今ハ家志有り一名も 一流ハカト記ス 一流ハ一何カト記ス

○志有り曲といハ或はニれぬち声なりともわきとたぬ  
やうして声を計きんにも志ほり入る家をりハ化符  
又むまをころハ化符也 先を白ひりとも云

△そかしくしひちよ

△大りこのなる海乃

△小し海れまを

三四

三十一



○らる曲 中志有り 凡そ 氣を行らりト云

多きは活き谷へうす死物をあぐれを風よひるか執る  
ことト 口の肉をちかづをいせんらる

百 △美やゆらんをきよくそも △ゆきの本たを

揚 △梅よりれれかや △其方ハえんふいよ

世してらる字れ前の一字にちううを入らんがてらるを  
去に依るれよりらるゆ時らんをへき文字かた故に改  
えりれれぬるそ前れ白切乃ををよくぬるををえん  
むらと初へんゆよりらるなり 勿掃息を洩さぬやう  
よるゆへー極らる声くくへ行おことれを後よた  
りてへるゆをさぬ故辰已あうりよぬなり

一々家新しれぬり乃事

下ル先也ス章をさぬる但之ゆぬるハ高ら也二行もぬると  
よそこのゆのちちと又こはラス章をさぬる次ハ大くこは章に

○ぬるの次ニわが二行あれえとれも下ル但キリニむてハ不定

△何あをくこきん △そひまうせそ

△其わききぬれしきあ色 △あゝあゝあゝあゝあゝ

△乃東ハよー乃 △木ヤ乃ちあれた

但くか二行もても物を其次へゆり梅をあまぬさげが

井 △一ゆすききみ △その名月れ

△らきるよー人もゆれ △いふめく花らも



○海り乃次ニか三河ニまニうニまニ字ニうニつニれニをニさニげニず

△ふさうんのらもむ ニやうたのむニたニ清ニ

△すりや火宅 ニひニそニせニゆニめニのニりニ

△けいせいも ニえニおニれニぬニ人ニ

△今ハ何より ニうニれニをニなニれニもニ

クリテハ其次視まニりニおニなニりニ用ニ心ニすニべニしニ

一字なり 一字なりて次ヲ爾ニ其ニ次ニハ大ニ々ニ此ニ章ニ

△又ニ家ニなりニ天ニ物ニ ニ四ニ季ニおニりニくニハ

△福ニくニらニさニめニくニ ニ復ニ成ニ男ニ子ニのニ

入ニりニよニびニてニ入ニりニハ次ニラニルニ一ニ字ニナニリニハ次ニラニルニ

一字なり 一字なりて次の字又ニくニるニ其ニ次ニ下ニルニ章ニニニ通ニルニ

△今ニせニうニすニまニとニ ニ念ニけニしニやニうニ乃ニ

△和ニ光ニのニ ニちニよニもニ人ニまニなニ

△まニひニひニらニはニ耐ニりニ

一なりこと

△まニさニ本ニのニわニらニうニあニくニ ニたニ川ニ名ニもニがニ一ニ也ニ也ニひニ将ニのニ

一入ニるニのニ事ニ

内へ入ニるニをニりニ故ニ信ニ息ニまニてニいニのニへニきニをニ湯ニ息ニまニてニりニ故ニ外ニへニ出ニをニ  
将ニとニるニやニうニまニゆニもニ今ニしニ此ニ前ニのニ一ニ字ニナニリニなニつニてニ入ニるニ  
初ニ入ニ次ニのニ下ニルニ章ニ大ニ々ニ此ニ章ニ一ニ信ニ息ニまニてニ下ニルニ



後 △ちのち陽とありて

定 △はやくきえても

千 △社とくくの

何 △右本は浦は

一字ハリ 尚トモ祀ス

陽息と解へ入るは似て別と

姑 △天とれちうを

シラ △もをぬんて

胡 △志あたらふを遊の

△あきあはれ

一 あらうや

一字はア花二字はあういりかート云

世 △らふれ妻の胤秋ふけて

此文の子字はあをを公たふ字ヲ陽息は視ハ必一秋、  
きの字はあよりてふ字ハ陰息の誓ニ似トスるはあん  
むきの字はあまなる字ハひぐ故何よりさグト云 余准之

圃 △らへばやをぬれま抄はつらぬも

是ハつ字ヲきく字はあまは作の字はあこつクトニ  
字ヲあまは視入を吉

△あまもたれひはあま抄衆門

何へあまあはるを知らで様小人

ああへ何の字はなまる也ー

一 一字さゆり

若 △火生さうしまい乃

花 △たそそあり月乃

白 △かくやと思ひあまらり

来 △いふきにありてあり

△是社神のたやの志ひよ



一 五章ヲ引て下音又後止不

<sup>あ</sup>△称名くろ之福ん乃本のと

<sup>ま</sup>△か茂のいつきりま

<sup>如</sup>△その里さんきうの私語

前よりウク下音皆病なり  
とてウカヌヤウノ現あり

<sup>せ</sup>△妻吹りせのひくき

<sup>れ</sup>△ありやらむすまは

<sup>り</sup>△咲あくのこれ花登

一 右同いふしれうり

<sup>ま</sup>△きも思ひしを望海と

<sup>田</sup>△流れひくきも勢ぢか

<sup>世</sup>△渡り風の白ひより

<sup>一</sup>△れりまてういきの妻

<sup>一</sup>△まよぬ月れ夜とたに

<sup>一</sup>△その柏木の及ひあま

如以ノ五章まで引下音又後止不引息のちりぬぬけぬぬよ  
中より次のウツ出スへ一左きてハ後の文字双いで獅子志郎と



